



KANGEKI

## KANGEKI 間隙 vol.14 藤川史人監督特集 『いさなとり』

ゲストトーク 藤川史人(監督) 加納土(映画監督)

小原治(KANGEKI 主宰・ポレポレ東中野スタッフ)



(写真左より、加納土監督、藤川史人監督)

**小原** まず、ゲストの土くんを紹介します。彼が2017年に卒業制作として撮った『沈没家族』という作品がびあフィルムフェスティバル(以下、PFF)に入選して、それを再編集した劇場版をポレポレ東中野でも上映させてもらいました。今日、なんで土くんに来てもらったかと言うと、理由は単純明快で、『いさなとり』がめっちゃ好きなんですよ。

**加納** そうですね。僕は2018年に初めて『いさなとり』を見たんですけど。旅をしている途中に尾道の映画館で上映されていて、本当にたまたま見たんです。すごく自分にハマるめちゃくちゃ好きな映画で。藤川さんと同じ大学を卒業してとか、同じ職場で働いてとか、同じ年にPFFに入選してとか、そういうつながりは全然なかったんですけど、一方的にずーっとずーっと好きで、好きだと言いつらしまくってたら、今日こういうふうに呼んでもらったので、すごく嬉しいです(笑)。

**小原** 尾道では藤川さんと話したんですか。

**加納** はい。でも『いさなとり』が本当にすごく好きだったのので、超リスペクトのドギマギ交流で、あまりうまく交流できなかった悔しさはあるんですけど。

**小原** 藤川くんは、その時のことは覚えてますか。

**藤川** はい、覚えてます。お一人だけ若い方が見てくれてるなと思って。見終わつたあとに質疑応答があったんですけど、誰も何も言わなくて(笑)。シネマ尾道の方が土くんを逆指名して「どうでしたか」って聞いたら、「自分もPFFで入選してて」みたいな。それはでも、上映が終わって挨拶したときに話したんですかね。

**加納** かもしれないですね。

**小原** 今回あらためて『いさなとり』を見て、やっぱり画が強い映画だなと思いました。撮影は渡邊寿岳さんといって、最近だと堀禎一監督の『夏の娘たち〜ひめごと〜』とか、草野なつか監督の『王国(あるいはその家について)』とか、素晴らしい映画の撮影を担当している方で。実はそのずっと前に渡邊さんが『いさなとり』を撮ってることを僕はずいぶん後になってから知ってびっくりしたんですけど、なぜ渡邊さんが撮影することになったんですか。

**藤川** 理由は本当に単純で、予備校のときからの友だちといいますか、同じ大学の同じ学部に進学して家も近くて仲が良くて。でも、一緒に何

かやったことはなかったんです。それで、いつか渡邊に撮影をお願いしたいなと思っていて、『いざなり』のときも、仲が良すぎて恥ずかしくて言えなかったんですよ。新宿の友だちの家でベロンベロンに酔っ払ったときに「やってくれ」ってなんとかお願いして。そしたら「わかりました」って。

**小原** 本当に画がいいですよね。それは撮影もさることながら、監督である藤川くんがあの場所に身を置いて、そこで出会った人や景色とともに過ごした時間が画面に現れていたし、そういう「時間の熟成」が藤川くんの映画のエッセンスと言ってもいいと思うんですけど、そういう作り方を選んだのはなぜですか。

**藤川** 理由はいろいろあるんですけど、小川紳介の影響はすごくあって。一方的に作って東京に持って帰って編集してっていうよりは、ひとつの土地に長く関わって、そこですくい上げるじゃないですけど、完成したあとも関わっていきけるような作り方をしたいなと。自分が商業映画の現場で下っ端として働いてるときに感じた違和感とか、そういうものが集積して、こういう形になったのかなと思うんですけど。



**小原** 土くんは今日改めて見てどうでしたか。

**加納** いやー、もう本当に、本当に、僕は好きですね。なぜ僕がこんなにウワーッてるのかを考えてみると、僕のバックボーンのひとつとして、高校卒業まで東京の八丈島っていう海の彼方の島に住んでいたことがあるんですよ。映画に映ってる風景や人の感じ、コミュニケーションの取り方とか、人が集まって何かをやるとき表情の感じとか、祭りとか、幼い頃の自分にすごく重なってくるものがあった。あと、いろんな時間があるじゃないですか。あざって親友が引越すってめっちゃ早いことだけど、逆に天狗は千年前からいて、めっちゃ長いスパンだよとか。ウジラ

がいるのはどんだけ前なんだよとか。ユウタ（主人公）のお母さんが働いているスナックのお客さんとの「また来週会おうね」の「来週」とか。70年前に原爆落とされた感じとか。すごくいろんな時間が重なってダブって見えてきたときに、究極、ユウタくんの顔が本当に良くて。いい役者っていうか、人間としてすごくいいなって思うし、そこにひとつの夏が物語としてハマってくる。それで、今日、8月29日じゃないですか。これは今日の映画ですね、はい。

**小原** 8月29日の映画（笑）。

**加納** 8月29日の映画ですね。最後、新学期を迎えたユウタくんが霧の中を自転車で走って行って終わるっていう。あと、藤川さん自身は映ってこないけど、一緒になって作り上げている人たちの顔を見ていると、監督自身が街に溶け込んで信頼関係を作ってやってるのが伝わってきて、見る方としてもすごく気持ちいいですね。

**藤川** いやもう、恥ずかしいですね。ありがたいですけど、本当に。

**小原** ユウタくんはどういう理由でこの映画に出ることになったんですか。

**藤川** 脚本はなかったんですけど、プロット的な流れは考えていて、地元の子が3人出てほしいなと思ったんですよ。主人公の男の子と、仲が良い友だちふたりっていう。いろんなところで募集したり口づてで広めてもらったりして、結局集まったのがこの3人だったんです。3人募集して3人しか集まらなかった。だから僕が選んだんじゃないくて、出会った感じですね。

**小原** 今回、藤川くんの特集上映をしようと思った理由のひとつとして、映画の幅を広げようとするアプロウチが面白いとリード文にも書いてんですけど、たとえばハーモニカを吹いてるおじいちゃんにインタビューするシーン、あれ、藤川くんがインタビューしてますよね。ああいう瞬間が映画の中にスッと入ってくると、映画の幅がグイッと広がる。その弾力が藤川映画らしいなと思うのと同時に、あのシーンはすごく変だなとも思って。最初、おじいちゃんを撮って、藤川くんがインタビューして、そのカメラがステージの方に移動するんだけど、次のカットでカメラがおじいちゃんに戻って、おじいちゃんが席を離れるまでを映画のシーンとして取り入れてるじゃないですか。すごい印象に残ってます。

**加納** その流れで言うと、お母さんが「とんとん

とんとん、こぶじいさん」と歌って子どもあやすところもすごく好きですね。あそこも流れが違う感じがします。グッとくるシーンがこんなに多い映画は他にはないし、3人の子どもの本場に最高だと思ふし。単体のシーンで一番好きだなと思ったのは、三四郎くん（ユウタの友人）が橋の上で踊っているシーン。めっちゃめっちゃいいなって。クジラから今につながる時間の流れとか、ユウタと根岸さん（ユウタの母の交際相手）がふたりで飯食っているときの気まずい時間の流れとか、いろんな時間があるなかで、踊り切るまでの長さが絶妙っていうか、全部のシーンの長さがすごくちょうどいいなって思うし、何より踊りが良かったですね。

**藤川** ありがとうございます。あのシーンは僕も好きです。かつこいいですよ。

**加納** かつこいい。三四郎、とってもナイスガイドになって。

**小原** 彼は本当にあの場所で踊っていたんですか。

**藤川** そうです。代々「備後神楽団」っていう神楽をやってきた家庭の子なんです。彼が今後受け継いでいくと思うんですけど。あの当時からステージに出て実際に踊ってましたね。



**小原** 極端な言い方をすると、映画って、この現実に対してカメラをどう置くのか、どう繋げるのか、それが映画独自の語り口を開発していくと思うんですけど、それで言うとな『いさなとり』は編集も独特だなって。少年ふたりが「今日の雲の流れ速いね」って言って空を見上げるだけで、その視線の先にある空の時間ってまったく違うじゃないですか。あの編集の意図は。

**藤川** 正直、編集のときの気持ちは全然覚えていないんですけど、撮影が終わって3~4ヶ月は怖くて素材を見れなかったんですね。ちょっと向

き合えるかなと思えた頃に、素材を見始めたら素材がすごくあって。土くんがさっき話してくれたお母さんと子どものやりとりは、渡邊が撮影の合間にiPhoneで撮ってるんですよ。そういうデータが膨大にあって、まずはそれを見るところからはじめました。そしたら、どんな映画にしたいのかが全然分からなくなってしまっただけで、でもそれがすごく心地良くもありました。だから、3人の少年たちの物語みたいなものはあるんだけど、それだけじゃない、我々があの夏過ごした時間みたいなものも感じられたらなと思いました。

**小原** この作品をフィクションだと仮定すると、だいたいフィクションって先に脚本があって、あらずじがなくて、そのとおりにシーンをはめていくけど、『いさなとり』は撮れたものを見て、脚本の流れみたいなものが組み立てられた部分もあるってことですかね。

**藤川** そうですね。プロットみたいなものはあったので、ユウタを主軸にした縦のストーリーはそのとおりに置いていくだけで良かったんですけど、この映画はそれだけじゃ違うなっていう部分をどうするか悩みながら編集しました。でも、僕は頭を使わなくて編集するので、感覚なんですよ。

**加納** 感覚、すごい合ってますね。じゃあ、たとえば「こぶじいさん」のところとか、夜お参りしているおじいちゃんのところとか、ドキュメンタリーパートっていうか、他のシーンとはちょっと撮り方が違うところはどのような感覚で撮るんですか。「あれを今撮ったら面白そうだな」みたいな感じで、生活してるなかでサッと撮るんですか。

**藤川** そうなんですけど、あれは渡邊がすごく。あのおじいちゃんを見つけた瞬間に「これはいいかな」とダメだ、インタビューしろ」って渡邊が無理やり僕にけしかけたんですよ。初対面の人だし、いきなりカメラ向けるのは正直嫌だったんですけど。だから、あのインタビューは半ばやらされてるみたいな感じです。でも、話すときすごく面白くて。撮影の後に、あのおじいちゃんが僕が借りていた家の近所に住んでることが分かって、仲良くなったんですよ。家に遊びに来て一緒にお茶を飲んだりするようになって。そういう関係があったので、映像も使えるなと思ったんです。「こぶじいさん」の親子は、あそこで一回会っただけなんですけど、渡邊が勝手に撮っていた映像を使いたいと思ったので、後日あのお店に行くと、親子に映像を見てもらいました。出てくれた方にはなるべくそういう作業をしよう。

**加納** パツと回した映像が膨大な量あるってこと



は、映ってないだけで他にもそういう映像がいっぱいあったってことですか。

**藤川** すごいありますね。僕が子どもたちと話している間に、渡邊は違うところを撮ったりしてますからね。子どもたちに演出つけてるときに「邪魔だ、どけ」って言われました（笑）。「この瞬間を撮らないとダメだ」って。

**小原** そういう生っぽさはもちろんですけど、壁にクジラのポスターがあって、そこにユウタの手の影が重なって、次のカットでクジラの鳴き声とともに風船がぶわっと膨らむ。あの一連のつなぎ方はすごく映画的呢なと思います。東京から男がやってきたことで自分の居場所を見失っているユウタの心情とも連動するシーンだと思うんですけど、映画ならではのエモーションが、それこそ風船みたいにぶわっと膨らむシーンで、あの辺のつなぎ方は映画的ですごくいいなと思いました。



**加納** つなぎ方はすごいですよね。やっぱりユウタだけのひと夏、中学生日記です、みたいな感じじゃなくて……僕も八丈島にいた中学生のときは、坂がいつばいで自転車登るのつらいとか、八丈島の太鼓は長いとか、中学生の自分の目線で日々の時間を考えていたけど、映画で根岸さんが広島に来るじゃないですか。中学生だけの目線じゃないっていうか、大人は大人の、根岸さんから見た時間もある。田舎だからって全部のんびりじゃなくて、当たり前だけど労働するし、東京から来た人と土地の人が馴染んでいくゆったりとした間（ま）の感じとか、早かったり遅かったり、大人の間がちゃんとある。母ちゃんも母ちゃんて、どう思ってるのか分からないけど生きようとしてる。そこに天狗目線とかクジラ目線とかが入ってくる。もう何本分の映画を見た感じですね……「何本分も見た」はちょっとよく分からないな（笑）。ひとつひとつの背景とか、その後どうなったのかを考えるから、めちゃくちゃ時間が長く感じるっていうか、豊かな時間って

うか。スナックに来てたふたりはあの後どうするんだろうとか、平和公園の前の橋で歌ってる人はあの後どうするんだろうとか、じいちゃんと一緒にいた女性はユウタが帰ったあとどんな話してんだろうとか、いろんなことを考える。そこがすごくいいなって。

**藤川** ありがとうございます。



**小原** ユウタのお母さんが働いているスナックの場所、最高ですよ。映画として本当に素晴らしいなと思いました。スナックの窓に赤い橋が映ってる。それによってこの物語の舞台を立体的に感じ取ることができる。あれがよく映画に出てきそうなスナックの場所だったら、この映画を感じる立体感は全然違ったと思います。

**藤川** あそこも渡邊が見つけてくれたんですよ。最初は、地元のドンみたいな方が持ってるお店でやらせてもらうはずだったんですけど。インの1〜2日前に渡邊が東京から来て、ふたりで三次の街を歩いてて、渡邊が「あそこ、お店ありません？」みたいな感じで見つけて。二人で突撃でお願いに行くと、一回目は断られたんですけど、すごく協力してくれた市議会議員の方のおかげで撮影できました。スナックのシーンに出てくるお客さんのうちの一人なんですけど。しかも、その方は、映画美学校の1期生か2期生なんです。僕が行ってダメでも、その人に泣きつくともOKになる。

**加納** 市議会議員が言うんだって言う（笑）。でもそういう根回しは大事ですよ。八丈も、横のつながりも大事だけど、ひとつ上の偉い人と仲良くと、いろいろ融通きくし、おごってもらえるし。そういう人付き合いの才能って言うところとズルっぽいけど、藤川さんの笑顔と根性で……（笑）。人の良さって大事ですよ。

**小原** 土くん、他に好きなシーンありますか？言い

残したこととかあれば？

**加納** 沈没家族にいたときは、大人も子どももわちゃわちゃしてたけど、八丈島で母親とふたりで暮らすようになったら、子どものエリア、大人のエリアって別れてた気がして。朝起きたら、母親と母親の友だちがぐでーと酔いつぶれてる。子どもは子どもで、そんな大人を見ながら「来年は中2だな。5年後は東京に出ないかな」とか、いろんな時間の中で考えてる。そんなふうに大人と子どもの時間が交わる感じで、2階からユウタが降りてきて、ベルトをかちかちやしながらくでーつとなってる男女二人を見てちよつとニヤツとする。すごいおわーつて胸に入ってくるシーンでしたね。あと、あそこでベルトしてるのがいいですね。大人の階段登るじゃないけど、ひもだけのナブサックとか、ミサンガしてるとか、絶妙なダサ中1ファッションだったのも良かった。

**藤川** ベルト、全然モタついてるんですよ。そういうところが愛おしくて。ミサンガは外してくれっお願いしたんですけど、自然に切れないと願いが叶わないからダメだって言われて。分かったって（笑）。

**小原** 僕はユウタが一人で立っているシーンにぐっときました。稲穂が風に揺れて、雲も流れて、大地の明るさも変わって、いろいろ移り変わる時の中にユウタもいて。ただ一方で、友達の引越しまりとか、お爺ちゃんの死とか、家族が新しくなるとか、いろいろ移り変わる時の中でユウタも風に吹かれるようにして身も心も任せられたら楽なんだろうけど、それにあらがうようにして存在してしまっている私自身も確かにいた。その証明としてこの映画もあるような気がしました。

**加納** 言い残したことと言うならば、本当に僕はこの映画大好きなので、もっと多くの人に見てもらえたらなっていうのはありますね。都内での上映は久しぶりってことなので、藤川さん自身の気持ちがあるなら上映してってほしいし、僕も応援したいです。



**小原** この映画の冒頭で、赤い橋の下をカメラがくぐる。くぐった先に空があつてそこにタイトルが出る。あの冒頭のワンシーンから、この映画の何かが提示されていたような気がして。同じ川なんだけど、間に橋があることによって、こちら側とあちら側で違う景色が広がっていることを登場人物それぞれに描き分けてる。そういう川の流れのような時間の物語って、言ったら「旅」ってことだと思っんですけど、旅っていうことが、藤川くんの映画づくりにも言えることですよ。次回上映する『Supa Layme』もそうですけど、その辺の話を次回予告も兼ねて少ししていただけたらと思います。

**藤川** すごく格好つけてるように聞こえるかもしれないですけど、映画を作ることと、生きるとか食べることを限りなく同等にしたいなとずっと思っていて。だから本当は一ヶ月撮影しますとかじゃなくて、もっと長く暮らしながらカメラを回せたらいいだろうなと思いつつ。『いさなとり』は、一人じゃ無理だと思っスタッフを呼んで、本当にみんなに助けられて撮ったんですけど。撮影中からスタッフの信用を失くすようなことをしてしまっ。スタッフと言っても、もともと友だちとして付き合ってた人たちばかりだったんですけど、この撮影の機に友だちじゃいられなくなるかもぐらい、彼らのことを傷つけたりしてしまいました。それで、次はもっと日常に即したやり方で、やるんだつたら一人でやらないとダメだと思っ。なおかつ、コミュニケーションがうまく図れなかつたんだつたら、いっそのこと日本語じゃない地域に行ってみようと思ったんです。

だけど、怖いんですよ。小心者なんで、それをやる勇気もなくて。実は、三次が居心地が良すぎて完成した後も一年ぐらいつつといたんです。焼き鳥屋でバイトしながら協力してくれたみなさんと仲良くなって。そしたらある時、映画に出てくれたお寺のお坊さんに「いつまでおるん。映画撮るんじゃなかったの。はよ出ていきなさい」って言われて。ハッってして。「映画撮らなきゃ」って思っ。それでペルーに行くことになるんですけど。だから、僕の中では旅をするっていうより、常に逃げている感じなんですよ。何かから逃げるようにしてずっと映画を作ってるような。今もそうかもしれないですね。でも、それが悪いことではない気はして。これが正解なのかも分からないままずっと作ってるんですけど。

『Supa Layme』ができた後、映画祭に応募したりしたんですけど、どこもダメで。結構キツイなっと思っいたときに、立教大学のドキュメンタリーの授業で上映してもらっ。学生の方たちが気に

入ってくれて、感想文を送ってくれたんですけど、その言葉ひとつひとつに救われたんです。じゃあもうちょっと自分から人に見せる努力をしなきゃと思いました。それで、横浜のジャック&ベティっていうミニシアターにかけあって、去年の12月に2日間だけ上映してもらいました。そのときに小原さんも土くんも来てくれて。上映が終わったあと土くに「僕、藤川さんの映画がすごい好きなんです、次もできたら絶対に見せてください」と言ってもらって、その一言にすごく救われたんですよ。ああ、作っていいんだって思えて。それで最新作の『ひかりのどけき』っていう映画を撮ることになるんですけど、もちろん、その一言だけがきっかけで撮ったわけじゃないんですけど……。

**加納** それだったら僕、ドキドキしちゃう(笑)。もちろん、いろんなきっかけがあつてですよ。

**藤川** いろんな人とか、いろんなものに助けられてやってきてる感じなんで、旅をしてるとか、そんな格好いい感じじゃないですね。ちなみに、今日は『ひかりのどけき』と『いさなとり』に出てくださった平吹正名さんがいらしてくれています。

(会場拍手)

**藤川** 『いさなとり』が縁で、未だに家族ぐるみの付き合いをさせてもらってまして。実際にユウタのお母さん役の方とご結婚されていて。ちょうど『いさなとり』の撮影のときぐらいに結婚されたんですよ。今、お子さんが2人いらっしゃるんですけど、『ひかりのどけき』は、4人で暮らしてる家で撮らしてもらいました。

**小原** 『いさなとり』を6年ぶりに見たんですけど、時間とともに色褪せるところかます輝きを増す瞬間があつて。なんでだろうって考えたんですけど、この映画はフィクション、つまり絵空事なだけけど、それをみんなで一緒に作った事実はなかったことにはならない。人と一緒に映画を作るって、映画を作った後もみんなで一緒に年を取っていくってことなんだなと思っていました。そのことと時間が経つほど輝きを増していくことが無関係ではないように思ったし、そうした時間の中で生まれた『ひかりのどけき』も本当に素晴らしい作品なので、人前で上映ということであれば、何か協力できたらと思います。

**加納** やっぱ藤川さんがいろんな人を巻き込んでるし、巻き込まれてるっていうふうにありますね。全然良いこと言えないけど(笑)。本当に、逃げながらも撮り続けていってほしいなって思

います。偉そうだな(笑)。

**藤川** いやいや全然。

**加納** 呼んでいただいてありがとうございました。

**小原** じゃあ最後に藤川くんからお客さんに一言言っていて終わりにしましょうか。

**藤川** 本当に今日はありがとうございました。僕も久しぶりに『いさなとり』を見たんですけど、思うことがたくさんあつて、このタイミングで見れてよかったのと、本当に小原さんに感謝です。来てくれたみなさん本当にありがとうございました。もうちょっと逃げながら映画続けたいなと思ってますので、また何かありましたら見ていただけると幸いです。ありがとうございました。

**小原** 藤川史人さんと加納土さんでした。ありがとうございました。

(会場拍手)

2021.8.29 Space & Cafe ポレポレにて  
採録・撮影=木村奈緒

『いさなとり』



2015年 | 91分 | カラー | ヨーロピアンヴィスタ | 日本  
出演：田中隼翔 木村祐斗 竹廣三四郎 平吹正名  
きむらゆき

撮影：渡邊寿岳 | 録音：野口高遠 | 助監督：奥田裕介  
監督・編集：藤川史人

藤川史人 (ふじかわ・ふみと)

1985年広島生まれ。特定の土地に一定期間暮らし、そこで生きる人々と映画制作を行ってきた。監督作に「過日來」(2012年)、「いさなとり」(2015年 PFF 2015観客賞日本映画ペンクラブ賞、バンクーバー国際映画祭招待上映、リマ・インディペンデント国際映画祭グランプリなど)、「Supa Layme」(2019年 リマ・アルテルナ国際映画祭国内部門グランプリ、パチャママ国際映画祭コンペ部門入賞など)、「ひかりのどけき」(2021年) など。